

有島武郎『或る女』論

新橋 優芽香

序章 前編の初稿『或る女のグリンプス』と『或る女』

前編の比較

有島武郎の『或る女』は前編と後編から構成されている。前編は雑誌「白樺」に『或る女のグリンプス』の題で明治四十四年一月から大正二年三月まで二年余り断続的に十六回連載された。その後全面的に改稿し、『有島武郎著作集／第八輯／或る女（前編）』として大正八年三月二十三日付けで叢文閣から刊行された。

後編は新たに書き下ろされ、『有島武郎著作集／第八輯／或る女（後編）』として大正八年六月十六日付けで同じく刊行された。

『グリンプス』と『或る女』全体での変更点

①名前の変更

田鶴子は平気で夫れを聞いたが車夫は宙を飛んだ

『グリンプス』(一)

葉子は平気でそれを聞いたが車夫は宙を飛んだ

『或る女』(一)

主人公の名前は『グリンプス』では早月田鶴子であり、『或る女』では早月葉子へと変更されている。この名前変更について、山田氏（有島武郎・姿勢と軌跡）より）によれば、

前編改稿時に葉子と改名されたが、ホイットマンの『草の葉』に因んだものであるということは、容易に察しがつく。

と論じている。この「ホイットマンの『草の葉』」について、有島は「ホイットマン論第一作においてホイットマンの強さと若さと輝かしさを発見し、そこに慰藉と鞭撻、撫愛と呪詛を感受した」（鈴木鎮平「有島武郎におけるホイットマンの相貌」より）と言っている。

この「感受」されたものは葉子の性格にも少なからず反映されている。特に「強さと若さ」「呪詛」については葉子を代表するものであると考える。

一家の離散を知らぬ顔にして、女の身空を唯濁り米國に行く
と云ふ事を田鶴子は不思議とも何んとも思つていなかった。

『グリンプス』（六）

一家の離散を知らぬ顔で、女の身空を唯濁り米國の果てまで
さすらつて行くのを葉子は格別何んとも思つていなかった。

『或る女』（六）

既に多數の男に戀せられて
『グリンプス』（二）

既に幾人もの男に恋をし向けられて
『或る女』（二）

葉子の病的な呪詛の犠牲
『或る女』（四十二）

元々持ち得る美貌を、巧みな言葉と表情をタクトとして操る姿は「主役」に足るものになっており、「強さと若さ」は「新しい女」として降臨する葉子にとって、なくてはならない象徴になっている。また、「呪詛」についても葉子の繊細で、深い思考をする性格を構成する上で必要不可欠な要素であると考える。

男の名は木田弧箒と云つた。
『グリンプス』（二）

男の名は木部弧箒と云つた。
『或る女』（二）

葉子の元夫である弧箒も苗字の変更がされている。弧箒のモデルは国木田独歩が想定されており、『グリンプス』の際は国木田の「木田」から取って名付けたのではないだろうか。

また、変更された理由として葉子のモデルが国木田独歩の妻で

ある佐々木信子と想定されていたことから、実際に信子が事件を起こし新聞沙汰になった際に、「木田」という名前から夫である国木田独歩を連想されるのを防ぐためであると考ええる。葉子と信子が無意識のうちに同一人物であるという解釈をされないように近い名前で「木部」と変更されたのではないだろうか。事件に関与していた人物としては倉地も当てはまるが、彼のモデルは武井勘三郎であったために、邪推される心配はないと考え、変更しなかったと考えられる。

②視点の統一

『グリーンプス』では基本的に田鶴子の視点から語られることが多かったが、田鶴子以外の人物からの視点も入っていた。しかし、改稿後の『或る女』では葉子の視点のみに統一されている。一部例を引用する。

青年は夫れに続いて狭い木柵をすり抜けながら、馬鹿にされたような改札の顔を憐れんだ。

『グリーンプス』(一)

改札は馬鹿になったような顔付をしながら、それでもおめめと切符に孔を入れた。

『或る女』(一)

古藤は腹を立てて居る間にも此冷氣で田鶴子の腹痛が又つくりはしなかつたかと氣使いながら見ると、まだ雨戸が立ててない。

『グリーンプス』(五)

古藤は何かに腹を立てているらしい足どりですかずかと縁側を伝つて来たが、ふと立止まると大きな声で帳場の方に怒鳴つた。

『或る女』(五)

以上の引用はどちらも古藤の言動部分を抜粋したものである。一人称視点に統一することで古藤の主体性が失われ、葉子を取り巻く要素としての効果がより強くなったように感じられる。小坂氏(「有島武郎文学の心理的考察」より)によれば、

改稿後は全て葉子の眼から眺められる。その結果、古藤は背景に退き、葉子が全面にクローズ・アップされる。これは作者の創作意図に変化が生じたことを示す。つまり、作者は改作で葉子一人の内面を描くことに焦点を絞ったわけである。

としている。そして「葉子を取り巻く敵である外側の明治の社会的現実」は遠景に押しやられ、前篇に仄見えた半封建的な近代日本

社会に対する急進女性の反逆という社会学的テーマは後篇において影を潜めることとなる」とも論じている。

有島は『グリンプス』を改稿する三年前、ハヴエロック・エリスの『性の心理的研究』を読んでおり、この作品に触れたことで『或る女のグリンプス』の改作に有用な諸点を得た」としている。つまり、ここから「急進女性の反逆」という大きなテーマから「葉子一人の内面を描くこと」によって「早月葉子」という人物一人

が生み出す「反逆」と進化を『或る女』で表現していると考ええる。

また、葉子一人に「焦点を絞った」ことにより、葉子を起点とすることができるようになり、葉子よりも一歩遅れた母・親佐、一歩進んでいる妹・愛子をより明確な姿で描きやすくなったのではないだろうか。そして「自分の生の苦痛を」「叫んだ」（書簡石坂養平宛より）この作品で「自己の救済を行った」（「同」と考える。

そして、『或る女のグリンプス』は『或る女』後編と比較すると現実世界に則した物語となっており、後編での「早月葉子」という一人のキャラクターが異質な悪女として物語に映える仕組みになっているといえる。

作品を比較することで、より『或る女』を理解するための足掛かりに出来た。さらに、改稿された文章ではしつかりとした肉付

けが印象に残る。作中に登場する手紙も内容に厚みが出ており、葉子の一人称に改作されたからと言って、他の登場人物が損なわれず、かつ『グリンプス』よりも生き生きと描かれている。有島自身もつともしっかり読み込んでほしい部分、知ってほしい部分として書き込まれたといえる。

第一章 「視線」の描写から考える

一 葉子から妹・愛子へ向ける「視線」

葉子が二人の妹へ向ける視線、態度は妹として大事にしているという点は共通しているが、他は大きく違う。自分の一つ下の妹、愛子に対しては「何んとなく性の合わない」と感じながら辛い態度で当たるのとは反対に、末の妹貞世には「骨肉のいとしき」に微笑み、優しく抱きしめていることからより大切にしていることがうかがえる。

後編になると、愛子への葉子の感情と視線がだんだんヒートアップしていく。

愛子は羊のように柔和な眼を眩そうにして、姉を窺み見ながら（六）

先刻から黙ったままで俯向いて淋しく坐っていた愛子は、沈んだ恨めしそうな眼でじつと叔父を睨めたと思うと、忽ち湧くように涙をほろほろと流して（八）

その眼は然し恐れても恨んでいるらしくはなかった。小羊のような、睫毛の長い、形のいい大きな眼が、涙に美しく濡れて夕月のようにぼつかりと列んでいた。（二十四）

葉子は愛子の眼に対して「羊」という形容をよく用いている。「羊」は日本国語大辞典によれば、「草食性で、性質はおとなしく群をなしてすむ」(JapanKnowledgeより)とある。

葉子が愛子に対して「羊」という形容を多く使うのは、葉子に反抗的な態度をとることなく付き従ってきたからだと分かる。また、貞世のように人前で大っぴらに泣くことはなく、影で泣いたり、黙って涙をこぼしていたりと大きな感情の起伏を持たない性格から大人しい子供であること、「殊に大きなときよな声で高々と笑った」叔父を「睨め」つけたことから家族を大切に思っていることが読み取れる。

そして大人しい性格、貞世の姉であるという自覚が愛子の中にあつたために葉子に対して甘えることもできず、お互いに心の距

離ができてしまっているのではないか。この距離があるから貞世は葉子と共に座っているにも関わらず、愛子は葉子の顔色をうかがう癖が付き、集まりでの席も一人で「淋しく坐っていた」のだ。

前編では「羊のように柔和な眼」「恨めしそうな眼」と簡潔な表現であるが、後編に入ると愛子の「眼」に対して事細かな描写が入る。「小羊のような、睫毛の長い、形のいい大きな眼」「柔和な多恨な眼」「男女の区別を知らぬ無邪気な眼」「先天的に男というものを知りぬいてその心を試みようとする淫婦の眼」「その眼は奇怪な無表情の表情を持っていた」「その眼は相変わらず淫蕩と見える程極端に純潔」「子羊のように睫毛の長いやさしい愛子の眼」、以上の表現が本文中に登場した。これにはどのような意図があるのか考えたい。

特に目立つのは「男性」に関係する部分と愛子の「容姿」に係る部分である。まず「男性」については、葉子自身の体験による思い込みが多く反映されていると考える。多くの男性の心を掴み、そのタクトで翻弄していた時の葉子の年齢は十九歳で、現在の愛子の十六歳という年齢に近い。自分がかつて経験した年齢に近いからこそ、愛子も同じことをしているに違いないという疑いが「淫婦」「淫蕩」という言葉に現れていると考える。

しかしその疑いを心の底では十分に持ちながらも、愛子の大人

しい性格をよく知っているために「無邪気」「奇怪」「極端に純潔」と愛子の純粹すぎる行動と葉子の邪推がぶつかり合つてしまつてゐるのではないか。

また、「容姿」についても「散りぎわの花」である葉子と「磨きをかけ上げたルビー」のような変化を遂げた愛子では、どちらが美しいかは明白である。葉子にとつてはそれが悔しく、受け入れがたい事実として迫り、嫉妬が強くなるほどあたりも強くなつてしまつてゐることが読み取れる。

葉子は愛子の所作を見ると一々気に障らないではいられないのだ。葉子の眼は意地悪く剣を持つて冷やかに小柄で堅肥りな愛子を激しく見据えた。(二十四)

葉子は愛子の容姿について「小柄で堅肥り」「堅肉の肉体」「小肥り」と繰り返して表現している。船上では「二重になる豊かな顎」を持つていたことから葉子自身もかつては愛子のような肉体であつたことが推測される。

しかしヒステリーの症状、精神的な疲労や婦人病の悪化を重ねるにつれてどんどんと痩せ細つてゐる。それは久しぶりに葉子に再会した古藤の「なるほどあなたは先よりはやせましたね」「顔の

色もよくありませんね」という言葉から想像できる。

そして自分自身も痩せ、この先は老いていくだけであるが、愛子は反対にどんどんと美しくなつていく。愛子を美しく見せてゐるのは若い年齢のせいもあるが、葉子自身のおかげに他ならない。もともと「掘り出されたばかりのルビー」にふさわしい「びちびちと締まつた肉付き」「抜け上がるほど白い艶のある皮膚」「短くはあるが類のない程肉感的な手足の指の先細な処」を持つていたが、葉子の「苦心」によりさらに美しくなつていた。

普段愛子への扱いは継子に対するそれだが、「自分の望み得る幸福の絶頂に近い所」にいた葉子の心は穏やかで快活な状態にあり、かつての自分を見るような大人しく従順な愛子の姿をみても落ち着いていられたのではないか。

やさしく、愛らしく、しおらしく、生れたままの美しい好意と欲念の命ずるままに、おぼろげながら神というものを恋しかけた十二三歳頃の葉子に、学校は祈禱と、節慾と、殺情とを強制的にたたき込もうとした。(八)

葉子の人格がゆっくりと形成されようとしていたころ、学校は女性としての感性と自由を否定した。否定されたことで「心の眼」

を開き男性を弄ぶようになった。「恋というものを生来知らぬげな四十五六の醜い容貌の舎監は女性教師だったのではないか。

「教師」に性別の記載はなく、その後「一度生血の味をしめた虎の子のような渴慾」に襲われるように青年を自殺に追い込んでしまったことから考えても、自分を監禁同様に置き、問い詰め、否定し続けた「醜い容貌」を持つ教師への当てつけと反抗心からだったといえる。

また、巧みなタクトを獲得したのはこのころからだと考えられ、魅力ある容姿を持つ葉子と「醜い容貌の舎監」は対比されている。この「舎監」が女性であるとする、五十川女史や田川夫人などの葉子よりも年上の女性たちと、葉子の関わり方、意識が見えてくる。

「十二三歳頃の葉子」は「しおらしく」という言葉から「ひかえめで従順な様子」(JapanKnowledgeより)だったことが分かる。それだけでなく、「物事に耽り易い」性格から自分の信じたことに對して結果を考えず突き進むところがある。

「それを造り上げた上でどうして神様の御手に届けよう、と云うようなことは固より考えもせず」に「帯を作り出し、出来上りが近づき、さらにのめりこんだところ」片時も編針をやすめてはいられず、「聖書の講義の時間でそっと机の下で仕事を続け」てい

る部分から、自分自身のなかで目指す目標を決めると、曲げることを許せない几帳面な一面がうかがえる。

まだ他人がみたことがないことに果敢に挑戦していく負けず嫌いなところがあつたように感じられ、成長するにつれて几帳面で負けず嫌いな性格が助長されていったのではないか。そして、論じてきたように愛子自身も葉子から大人しい性格、従順な羊を思わせる立ち振る舞いをしていることが分かる。

葉子にとってしおらしく一途に過ごそうとしていた赤坂学院での時間は、思い出すだけで「火のような」「憤怒が燃え上がる」ほど憎々しい記憶になってしまっている。愛子が葉子に対して貞世のように甘えることができず、かしこまって規則正しくお辞儀をする他人行儀な姿勢は、信じられるのは大切になっている妹たちだけという葉子の気持ちにじつたように感じられるだけでなく、「愛子が何事につけても猫のように従順で少しも情というものを見せない」ことがより葉子の憎しみに拍車をかけている。

そして、愛子の葉子に対する態度が当時の自分を思い起こさせるために「すぐ癪に障」ってしまうと考える。自分を重ね合わせしてしまうことで当時の教師の姿を思い出し、無意識に「眼が意地悪く剣を持って冷やかに」見据えてしまうのだ。それが常に愛子と接するときにはセツトになっていたが、倉地と妹たちと理想に

近い生活が送れるようになって、自分の意志を通し、望みをほほ叶えられたことで終結に一時は向かったと考えられる。そのため貞世ではなく愛子の容姿へ気を遣う余裕が葉子の心に生まれたのではないか。

また、葉子が考えているよりも愛子の心の成長が早いことで、貞世よりも葉子の顔色をうかがい、気を遣い従順に見せている一面があると考ええる。どんな相手にも動じない姿勢をみせる気の強さや、初対面である倉地や岡に対してはつきりと受け答えしていたことが葉子にとって意外に感じられていた部分から分かる。

しかし、成長が早いだけで完成されてはいないため、気まずい気持ちがある倉地には「眼を伏せて」、上品で好青年な岡には「じつと」「見やりながら」答えている。これが葉子には無意識に愛子がタクトを扱っているように見えて、岡に向ける視線を「淫蕩に見える程極端に純潔」と評したのだ。

さらに岡も嵌まったことで葉子の疑いは確信に変わり、船上で会ったときは自分に向けられていた岡の視線が、愛子へ向けられていることにより、もともと「憎しみ」を一層深めることになった。

二 絵画「ラス・メニーナス」から考える「視線」

「視線」の問題は文学だけでなく、絵画でも論じられている。その一つとして、ベラスケス作「ラス・メニーナス」を挙げたい。

「ラス・メニーナス」は、「絵画の神学」としてルカ・ジョルダノにより称えられ、作者であるベラスケスの最高作品と考えられている。スペイン語で「ラス・メニーナス」は「女官たち」という意味を持ち、絵画の中心に描かれている女官二人を指していると考えられる。

登場人物の内、女官二人に挟まれるようにして描かれているマルガリータ王女と、ベラスケス自身を描いた画家を含めた六人は正面を向き、絵を鑑賞する側に視線を向けている。大高氏は「恭しい彼らのポーズや作法、後壁に映った像のイメージからそれが国王と王妃リアナに対しての視線であることが知られよう」(ベラスケス作「ラス・メニーナス」―主題と構想をめぐって―より)と論じている。

つまり、同じ絵画の中に登場人物として描かれていても、それぞれ向いている「視線」の方向が違えば、それによってお互いに考えていることも変わってくるといえる。

特に、題名にもなっている女官二人の行動に注目したい。王女の右側の女官は体の向きは王女へ向いていながら、顔はしっかりと

と正面を向いている。対して王女の左側で水壺を差し出す女官は、体ごと王女へ向いている。この二人について考えられるのは、国王夫妻と王女、どちらをより重要に思っているか、忠誠心の違いであると考ええる。王女の左右に控える女官は、共に高位の貴族出身の王妃付きであり、立場は同じということになる。

つまり、左の女官の方が王女の方へ「視線」を向けていることから、国王夫妻よりも王女への忠誠心が高いと分かる。なぜなら、もし仮に何か起こった際に「視線」を外していればすぐに確認することが出来ず、一瞬の隙が生まれてしまうからである。

また、右の女官は体を王女の方へ傾けているだけで指先ですら王女の方へ向いていない。逆に左の女官は、「視線」を向けているだけでなく、跪いて水壺を差し出していることから読み取れる。

なぜ国王夫妻への「視線」よりも、王女へ対する行動を見ているのかということであるが、マルガリータは「国王夫妻にとって、唯一の嫡出子であった」(同)からである。生まれてくる子供たちは皆亡くなってしまう、残ったのがマルガリータのみであった。一番傍にいたはずの女官の不注意でマルガリータになにかあれば、国王家存命の危機となる。

以上より、同じ女官であっても、仕草や「視線」一つで王女への忠誠心を図ることができるのだ。

このような分析から、第一章でも論じてきたように、「視線」一つから多くの情報を得、相手の考えを探ることが出来る。さらにこの「ラス・メーナス」は『或る女』と同様に作者が自らの作品に投影されており、作品自体に作者の面影を感じさせる。

そして「視線」によって言葉に表されない深層の感情までも考察することが出来るといえる。

今回は女官二名に注目したが、忠誠の対象である国王と王妃が最奥に描かれていることについて「太い黒枠取りの鏡の画像は第一に肖像画の性格を備え、また二人が、他の登場人物と同じ舞台の延長線上に立っていることを鑑賞者に深く印象づける、二重の使命を帯びている」(同)としていることから、一人ひとりに忠誠を向けられながら、境界線を「太い黒枠取り」で取ることによって、決して無関係ではないことを強調している。圧倒的な存在感と権力を、このような手法で内外に示しているといえる。

この章で論じてきた「視線」の表現は、「視線」を読み取れる葉子と、読み取れない他人のコミュニケーションの挫折を表したものであり、「視線」はそこに現れる他者との関係、気持ちを忠実に表現するものである。「目は口ほどに物を言う」ために、従順で言葉少なな妹、愛子からも人一倍鋭敏な神経を持つ葉子は多くの情報を得ようと画策してしまう。

その試みこそがコミュニケーションの挫折の第一歩であり、自らの精神を冒していくことにつながる。巧みな力を得てしまったが故に引き起こされた弊害だともいえるが、葉子が自己の世界で自己を確立したまま生きていくには、必ず対峙しなければならぬ問題なのだ。

第二章 女性から見る「早月葉子」

五十川女史

葉子の送別会では祈禱を行い、葉子へ苦い思い出を植え付けた赤坂学院への入学を手伝っていたことから早月家、特に親佐との関係が深かったことが読み取れる人物である。

五十川女史と叔父とが切出そうとした言葉は、物の見事に遮られてしまった。(八)

叔父が慌てて口の締りをして仏頂面に立返って、何か云おうとすると、葉子は又それには頓着なく (八)

「面と向っては、葉子に口小言一つ云い切らぬ器量なしの叔父」は親類が集まっている送別会では「主人座に座り込んで」あたか

も普段から威厳をもって葉子へ接しているかのように振る舞っている。

この叔父の行動と「見向きもせず、叔父の言葉を全く無視した態度」で話を続けている葉子の様子から、男として主人らしく振る舞いたい叔父に対して、早月家では時代の流れとは違い、女性が中心となって家を仕切っていたことが分かる。

また、葉子は五十川女史に対して「当の敵とも云うべき」と明らかに目の敵にしている様子が読み取れる。葉子が五十川女史を「敵」と認識している理由について、赤坂学院に在学していた時の出来事がきっかけであると考えられる。

それだけでなく、五十川女史は早月家の親類たちのなかでも「その晩そこに集った人々の中では一番年配」で「一番憚られている」厄介な存在であることが分かる。

さらに「中老の官吏」の働きかけによつて大事な妹たちの行く末すらも任せられそうになっており、葉子は自分と同じ思いをさせないよう、特に気を張って五十川女史と対峙している。

私は亡くなった親佐さんのお考えはこうあろうかと思つた所を申ししたまでですか (八)

その際になって五十川女史はたと葉子の事を思い出したらしく、田川夫人に何か云っておいて葉子のいる所にやってきた。「いよいよお別れになったが、いっぞやお話した田川の奥さんにおひきあわせしようから一寸」葉子は五十川女史の親切振りの犠牲になるのを承知しつつ（九）

五十川女史の葉子に対する態度から、「母」のような素振りが見て取れる。母である親佐が死に際に最も気にしていたことは葉子の将来であつた。そこで基督教婦人同盟の会長である五十川女史に残りのことを託して死んだ。

葉子自身は五十川女史の「まあまあと云うような不思議な曖昧な切盛り」によつて木村の婚約者となつたために、余計に妹たちが気がかりだつたと考えられる。五十川女史は親佐に頼まれたこともあり、さらに、葉子の家の状態や叔母の服装から転がり込んできた叔父と叔母の態度と生活を知り、葉子によつて舐められていることがわかつたのではないか。

だからこそ自分が親佐の代わり、つまり「母親」代わりとして「一番年配」の女性である立場を利用してなつていのではないかと考える。

五十川女史の「四角を思い出させるような頑丈な骨組み」で

「がっしりと」居直る姿は、良人の浮気後子供たちを連れて仙台に赴き、仙台支部長としてたつた「三ヶ年の月日」で「早月親佐を仙台になくしてはならぬ名物の一つにしてしまった」親佐の姿を思い起こさせる。

しかし、葉子と妹たちの代わりとして親佐の後釜に入るには五十川女史は力不足であつたといえる。なぜなら、親佐は葉子の性格の基盤を作り上げた「新しい女」であつたからだ。親佐自身が「新しい女」の先駆けであつたため、葉子と親子関係よりも強く結びつけられる女と女の「ライバル関係」になることができた。

それに対して、五十川女史と葉子は親子として血のつながりがないだけでなく、早月家で「新しい女」に教育された葉子と基督教婦人同盟会長でありながら、前時代的的教育を行っている赤坂学院を推しているところから、五十川女史には「新しい女」の素質がないものと読み取ることができる。「新しい女」になり得るための特性を持ち合わせていないからこそ、葉子の気持ちを理解することができず「不思議な曖昧な切盛り」しか行うことができないのだ。

そのため、主人として振る舞いたくとも葉子に発言一つ一つを阻害されている叔父と同じ扱いをされ、五十川女史の答えようとする言葉と叔父の言葉を同時に故意に引き出されていると分かる。

葉子にとつて、自分と妹たちの邪魔をしてくる親族たちは、もはや眼中にないことがこの送別会の場面から読み取ることができなく、奪い取れるものを全て奪い取ろうとする親族たちは敵でしかなく、そのなかでも「母親」代わりになろうとしてくる五十川女史が葉子にとつて「当の敵」であると考えられる。

その証拠に、葉子がつやに残させた最後の手紙には親類たちや五十川女史の名前はなく、「母親」代わりどころか、真の意味では身内ですらなかったのだ。五十川女史を「母親」代わりとして考えることで、葉子と親佐の強い結び付きがより表面化してくるといえる。

第三章 作者「有島武郎」から見る「早月葉子」

一 モデル問題

①有島武郎の生い立ちから自己投影を探る

葉子の婚約者である木村貞一の友人として古藤義一は登場する。古藤は物語の中でも唯一他の人物たちとは一線を画して生きる人物として描写されている。主人公である早月葉子の近くにいなから、葉子のタクトに惑わされることはなく、葉子に対して正論を説くのだ。そんな古藤のモデルは作者である有島武郎自身であるとされている。

有島は自ら「古藤といふのは私です」と黒沢良平宛の書簡で明言している。また、「木村といふのは森廣」とも記載があることから『或る女』はモデル小説であることも分かる。葉子のモデルとされている佐々木信子については「その人を如何取あつかふべきかを知らない時代に生れ出た一人の勝氣な鋭敏な急進的な女性を描いて見たままで、信子さんの肖像を書かうとしたものではありません」と否定している。

有島は石坂養平宛の書簡では「思想を誤解なさつてゐるのではないか」と前置きしたうえで、男尊女卑が当たり前であった時代に男性でありながら女性側の意見を述べている。「何物も男性から奪はれた女性は男性に對してその存在を認めらるゝ爲めに女性の唯一の寶なる貞操を賣らねばなりません」とし、「同時に女性はまだ女性本來の本能を捨てることができません。即ち男子に對する純眞な愛着です」と続けている。有島の言葉をそのまま解釈するのならば、この言葉の先には主人公である葉子の姿が鮮明に思い浮かぶ。

特に有島の言葉に当てはまり、葉子が自分自身を捧げながら愛情とそれを超えた感情を向けた相手が倉地三吉である。葉子は学生時代から「その紅い唇を吸わして主席を占めた」と「浮名を負わせ」る程の美貌と「幾人もの男」の「囲みを手際よく繰りぬけ」

る力を得ていた。しかし、「この二つの矛盾した本能が上になり下になり相剋してゐる」ために倉地に対しては逆に自分が囚われてしまつており、これこそが女性の「本能」だとして創作意図とともに作品中での葉子が位置付けられていると考える。

そして、男性たちとの関係、倉地との船上での逢い引き、同棲生活や妹、愛子との関わり、母、親佐、五十川女史との確執など、論じてきた通り葉子の中には女性、男性の域を超えて常に愛情と憎悪が入り混じつており、その「二つの矛盾した本能」『或る女』におけるアンビバレントな葉子像―石坂養平書簡を手掛かりとして―より）を併せ持つ女性としての像が葉子にしっかりと投影されていることが読み取れる。さらに有島は同書簡で「私は自分の生の苦痛をあのかで叫んだのです」と書き残している。

つまり、葉子のモデルは自身が否定しているように佐々木信子ではなく有島武郎自身であると考えられる。さらに、有島は「内気な、鈍重な、感情を表面に表はすことを余りしない」（佐渡谷重信「評伝 有島武郎」より）という性格を持つており、これは嚴格で教育に熱心であった父に対して、少なからず恐怖心を持つており、自分の要望を伝えることが出来ないところから形成されたものだと考える。

第一章で考察してきたような愛子の性格的特徴とも当てはまり、

この有島と父の関係は葉子と愛子の関係とも捉えることが出来る。また『或る女』において「早月葉子」のモデルは有島であるが、有島自身が葉子と愛子両方の特性を併せ持つていると考える。

それを姉妹として描くことで、それぞれ別の特性をメインで持っていないながら同じ特性も持ち合わせ、思考をある程度理解することが出来ると考えられる。

葉子は後編において、愛子に対して男性との関係を巡つて取り乱し、強く当たると。これも葉子自身が愛子の年齢ですでにタクトを十分に使いこなしていたからであり、愛子に同じ力があることを見抜いていたために激しい嫉妬と憎しみに襲われていると考える。

有島は書簡や『或る女』本文、キャラクター形成から男性でありながら女性の気持ちを感じすぎる程に理解していることが読みとれる。有島をここまで駆り立てる理由について考えていきたい。

有島は親の血筋の影響か「性の問題に対しては異常なほど早くから暗い情念を持つていた」（山田昭夫「有島武郎・姿勢と軌跡」より）。この「暗い情念」について有島が幼少期から学生時代に経験した「Sodomy（男色）の関係」が影響していると考えられる。

学習院予備科第三級（小学校四年に相当）に編入した際は、「感

情を外に表さない性格から、上級生に抱きつかれるという予期しない事も起きた。美少年である武郎を上級生が黽つたのである（「同」）。また、札幌農学校時代には親友である森本厚吉とも関係を持つていた。そしてアメリカへ留学した際も、小柄であった有島はその「美少年」も相まつてかなり目立つ存在であった。

「暗い」と表現されているところから有島にとつてこの「Sodomy（男色）の関係」は、知り得なかつた世界への一歩目であり、一線を越えたことで「外れていること」を知つてしまつたが故の表現であつたのではないだろうか。このように自分自身が女性のような体験をすることで、女性が社会的に男性より弱い立場であること、「その存在を認めらるゝ爲め」には自分の持てるものを全てさらけ出さなければならぬことなど、女性の立場を尊重した考え方ができるようになつたのではないだろうか。

「Sodomy（男色）」の経験の他に有島を女性的思考へ導いたと考えられる例を少し葉子と合わせて考えてみたいと思う。

先程触れたように父である武との関係、親友である森本厚吉との関係が大きく関わっている出来事が有島を女性的思考へ導いた要因の一つであると考ええる。これを考えるにあつて、以下を参考にしたい（フロイト（小此木啓吾訳）技法・症例編「自伝的に記述されたパラノイア（妄想性痴呆）の一症例に関する精神分析

的考察」より）。

パラノイア患者には、一般神経症患者とは異なつた特異性が認められる。その特異性とは、まさに他の神経症患者が秘密として隠しているもの（無意識）を、パラノイア患者はむしろ歪曲された形ではあるが洩らすことがあるという点である。

「パラノイア」とは妄想性痴呆のことを指し、この症例研究として取り上げられているのがダニエル・パウエル・シュレーパーの『回想録 ある神経病者の手記』である。ザクセン控訴院議長であつたシュレーパー法学博士は妄想や脅迫観念、異常体験を主訴とする精神疾患を発症して精神病院に三度入院した。

このシュレーパー博士の症状は葉子のヒステリーの症状に酷似している。また、葉子のキャラクターへ有島自身の投影があることについて考察してきたが、有島にも「性」における葛藤が長年あつたため、その点において「パラノイア」を発症していたのではないだろうか。

「他の神経症患者が秘密として隠しているもの（無意識）を、パラノイア患者はむしろ歪曲された形ではあるが洩らすことがある」との言及に対して、この『或る女』が挙げられる。『或る女』は「確

認し得る限りで女性問題について最初に論じたのは、一九一九年五月から六月の女学校同窓連合会の学術講演（『内部生活の現象』として一九二〇年一月「婦人之会」に公演筆記が掲載された）であるから、有島の女性問題への視点の獲得は、『或る女』全編の執筆時（中略）ということになる（三田憲子「有島武郎の女性問題評論」より）と論じられている。

以上の通り、有島が「女性問題への視点」を得ることで、今まで持っていた女性への意識が完成され、今まで押し込めて来た自分本来の姿の投影が『或る女』に「歪曲された形」で「洩ら」されたのではないかと考える。合わせて、投影された葉子自身も「パラノイア」の片鱗を持っていたと考えられる。

いつもヒステリーや婦人病の悪化の影には、葉子の行きすぎる思考があり、物語後半が終焉に向かって進むにつれ、妄想が悪化していることから分かる。

シュレーパー博士は「私は最初の発病が全治した後、妻とともに総じて全く幸せな、外面的な栄誉にも満たされた八年間を過ぎた。ただ今度こそ子どもができたろうという期待が幾度も裏切られてがっかりするといった、子宝に恵まれない悩みがあっただけである」（『同』）と語っている。

葉子も愛子と貞世を迎え「理想の生活」を送っていた時期があっ

た。この時は船上から日本へ帰国し、ずっと悩み続けていた倉地の妻の問題が解決し、体調も安定していた時であった。シュレーパー博士の「八年間」に対して葉子の場合には二週間ないほどであったが、どちらも「満たされた」ものであったといえる。

そして、シュレーパー博士は悩みによって「幾度も裏切られてがっかりする」といったマイナスな出来事を繰り返し体験するようになる。その後また病気を発病しており、葉子も「理想の生活」から一転、自分の病気の悪化、愛子の目覚めなどマイナスな出来事に襲われている。このようにお互いに同じような経過をたどっていることから、同じ病気をもち、精神不安定に陥っていたと考える。

以上から、有島の精神状態や生い立ち、経験が多く反映された作品が『或る女』であるといえ、有島の自伝的要素も多分に含まれているといえる。今回は言及しなかったが、他の人物にも実際に参考にされたモデルがいたことから『或る女』は、有島の持つ女性視点によって描かれた現実の物語だったと考える。

二 結末創作問題

葉子の死で締めくくった理由について

序章で『或る女のグリンプス』と『或る女』を比較して考察し

たが、『グリーンプス』では葉子と倉地の思いが通じあひ眠りに落ちるところで終了している。しかし、『或る女』では葉子が持病である婦人病をこじらせ、病院で誰にも看取られることなく一人苦しみ続ける結末になっている。

「痛い痛い痛い……痛い」葉子が前後を忘れ我れを忘れて、魂を搾り出すようにしてこう呻く悲しげな叫び声は、大雨の後の晴れやかな夏の朝の空気をかき乱して、惨ましく聞え続けた。(四十九)

『或る女』終焉部であり、葉子の終末部でもある。有島は後編の執筆中に書簡を通じて「葉子は中々しぶとい。こつちの思ひ通りには死んでくれない」(江種満子「葉子の死―『或る女』再論」より)と訴えている。

この言い分からすれば、有島は葉子へ救いを差し伸べなかったのではなく、殺すべくして死んだということだ。「葉子の意志とは無関係な、手術の失敗という即物的次元で考えられている点にうかがえる作者有島の強引き」(「同」)はどこからくるものなのだろうか。

有島にとって「死」は遠い存在のものではなかったように感じ

る。例を挙げるならば、「定山淫事件」、「波多野秋子との情死行」である。「定山淫事件」は森本厚吉との同性心中未遂事件で、有島もキリスト教における苦悩に耐えかねて死を追い求めている。

しかし、自らが死のうとする意志よりも、親友の深い苦しみに「同情して引きずられたという印象がよい」(山田昭夫「有島武郎・姿勢と軌跡」より)のだ。「波多野秋子との情死行」も同様である。「秋子の不幸な境遇に同情しているふしが多分にある」(「同」)ため、有島にとって「死」とは恐れるものではなく、むしろ自ら求めていくものであったと考えられる。

しかし、葉子は違う。有島にとって葉子は自らを映したものであるが、葉子は「同情」で死ぬことができる有島と違って「生に執着」している。「これで死なれるものか……こんなにされて死なれるものか」と激痛の中でもはや「得体の分らない動物」にまで成り下がっても生きることを諦めておらず、そこどころかさなる憎しみさえ燃やしている。葉子が生きようともがいている最中、呼ばれた古藤は葉子の最期の願いを叶えるために内田を呼びに行く。小石川に住んでいる内田はなかなか現れず、古藤も戻らない。

前述してきたように古藤のモデルは有島であるため、有島が葉子の最期の願いを叶えられないまま葉子は有島の手によって死に

ゆくのだ。有島の思いとして、生きようともがいている葉子を出るだけ助けたかったのではないだろうか。

しかし、「葉子の意志とは無関係な、手術の失敗という即物」によつて人為的に「死」へ追い込んだのは、葉子ほど「自由」を渴望し、自らの思いのままプライドを持つて生きてきた「新しい女」を自殺させてしまえば、有島が『或る女』で伝えたかった女性の尊厳を損なつてしまうからだと考える。

損なわず、なおかつ有島の葉子の苦しみへ対する「同情」と、最期に傍に誰もいないことで表現する葉子の家族へ対する業の深さを表し、救つてあげたいがあと一歩間に合わない、「死」へ少し早く追い立てるのに「強引」ともとれる展開となつたのだと考える。

有島自身が、様々な性格を併せ持つ多面的な人物で、葉子は最期まで「思ひ通り」にいかない人物であつた。有島自身が「性」を始め、多くの苦悩を抱えていたからこそ、選ばれた「死」の形だつたといえる。

結論

『或る女』は有島によれば「人生の可能」を追求した作品であつた。この「人生の可能」というキャッチコピーは広告文がそのまま使用されたとも言われていたが、『或る女』にこそ似合う言葉で

あると考える。

そして、前述したように有島は自身を『或る女』においては「古藤」とし葉子を見守る存在である。『或る女』の重要な場面で必ず現れることで、葉子の「蜘蛛の糸」であり続けるのだ。

また、男性でありながら女性の気持ちを女性以上に掴み、高い解像度で描いている。それは有島の精神が女性に近く、なおかつ女性のことが恋愛対象であつたために女性同士の醜い執着や争い、男性へ向ける愛しい気持ちなどを明確に書いているのだ。

それによつて物語にリアリティが付随され、新しい女性として目覚めた葉子をより身近に読者が感じられるよう全体が構築されていると考える。

主人公である葉子は、最後の結末に関わらず、自分の生き方や大事にしたいことを貫いたように感じる。誰しもどこかで諦めてしまふような場面や説得が繰り返されていても、決して道を逸れることはなかつた。葉子が追い求めた「人生の可能」は、有島が求め続けられなかつたものを表し、間接的に有島自身が得られ、「救済」へ向かえるように仕向けたものだったと考える。

参考文献

有島武郎『或る女』（新潮社 一九九五年）

有島武郎『復刻 或る女のグリーンブス』(山梨英和短期大学国文学研究室 一九六九年)

有島武郎『石坂養平宛書簡』(封不詳・原稿用紙ベン 一三八七年)

有島武郎『黒澤良平宛書簡』(記載なし 一三四七年)

江種満子『有島武郎論』(桜楓社 一九八四年)

小此木啓吾訳『フロイド著作集 第九巻』収録 技法・症例編「自伝的に記述されたパノイア(妄想性痴呆)の一症例に関する精神分

析的考察」(人文書院 一九八三年)

大高保二郎『ベラスケス作「ラス・メニナス」―主題と構想をめぐって』(美術史三十 一九八一年)

小坂晋『有島武郎文学の心理的考察』(桜楓社 一九六九年)

佐渡谷重信『評伝 有島武郎』(研究者出版 一九七八年)

鈴木鎮平『有島武郎におけるホイットマンの相貌』(明治書院 一九八二年)

朴智慧『有島武郎『或る女』―視線の力学―』(京大文学部国文学研究 二〇〇六年)

三田憲子『有島武郎の女性問題評論』(右文書院 一九九六年)

山田昭夫『有島武郎・姿勢と軌跡』(右文書院 一九七二年)

廬豆安『「或る女」におけるアンビバレントな葉子像―石坂養平書簡を手掛かりとして―』(比較文化研究 二〇二〇年)

(二〇二二年度卒業)